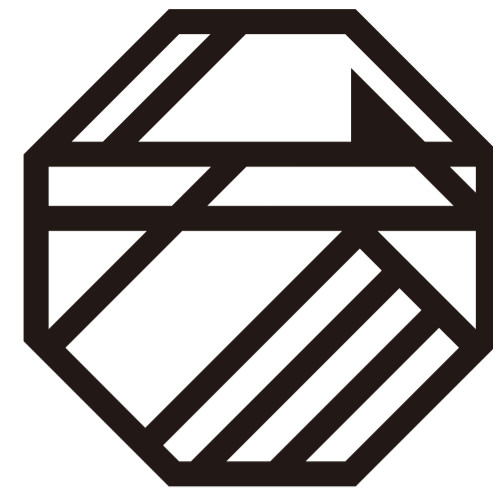




10年着られる  
育てるTシャツ

冠衣

三重県指定伝統工芸品  
伊勢一木綿  
— S E M O M E N —



# SANGOU™

The Magazine of Fashion & Japanese Culture 

JAPANESE  
ROUGH  
KIMONO  
STYLE





# THE CULTURE OF BLACK

株式会社京都紋付 / 荒川 徹



## 黒に染めること百年で 到達した黒より黒い 「深黒」という世界一の黒

2017年の2月に行った第一回の展示会でいただいた最も多かったお言葉。「冠衣の黒はないのか?」。とてもたくさんの方に意見をいただいた。しかし、その時点で冠衣の黒を商品化する算段はついていなかった。SANGOUの冠衣は伊勢木綿のキナリの反物を使っている。黒の反物を使用すると、反物の単価が跳ね上がってしまうのだ。その理由はキナリのものを黒に染める為に様々な工程が発生するのが理由だ。冠衣は原価設定をキナリ生地に合わせている為、伊勢木綿の黒反物を使用すると価格が倍近くになってしまう。それではなかなかうまくない。

そんな理由で黒の冠衣は諦めていたのだが、ある先輩からいただいた一言で事は動き出した。「この冠衣を黒に製品染めしちゃうえばいいんだよ」とのことだった。その際に「京都紋付」という黒染め専門の会社があることを教えていただいた。しかもただ



▲株式会社京都紋付の玄関。御黒染司の文字がその誇りを感じさせる。

黒に染めるのではないという。京都紋付曰く、通常の衣類の黒は黒ではなく墨だと。本物の黒は、真っ黒に染めるのはうちにしかできない、というような会社であることを聞いた。

興味に狩られた菊田参号は早速京都紋付にアポイントをとり京都へ。行ってみると立派なれんがが迎えてくれるなんと雰囲気のある会社だった。

名前の通り、京都で紋付を黒に染めること100年の歴史のある会社。出迎えていただいたのは4代目の荒川徹氏。出会い頭から熱さが体外に滲み出ているようなパワーを感じざるを得ない人物だった。

100年の歴史の中で、京都紋付の最も際たる技術が「深黒加工」という技術だ。これこそが京都紋付の黒が他のそれとは違うと言われる所以。簡単に説明すると黒に染めた後に、独自に開発した「深黒液」にて加工処理をする。その液体は驚くべきことに透明だという。つまり黒い液に浸して加工を施すのではないのだ。この加工によって、なぜ黒がより黒く見えるのかは「光の反射を抑える」ことで深い黒を実現しているのだという。

荒川氏とお話をさせていただく中で驚くべき内容に耳を疑った。もともと社員50名ほどでやっておられたのだが、昨今の着物業界の不況の煽りもあり、ここ数年で40名ほどが退職され、現在は9名でやっているということだった。しかし、100年やってきたその「黒に染める」という技術をなんとか絶やしてはならないという想いで、様々なものづくりに着手していく中、様々なメディアにも注目されるという素晴らしい結果を生み出している。

その中でも菊田参号が特に心を打たれた取り組みが「KURO FINE(クロフィネ)」という取り組みだ。愛着があるものの、長年の使用で汚れやシミが目立つようになってしまった衣類を「リユース」しようというのが「KUROFINE(クロフィネ)」のコンセプト。つまり、古くなった衣類を京都紋付の「深黒加工」で染めかえて、新しい表情になった衣類を再利用するというのだ。一つの



IM-H02 Henley 黒冠衣

京都紋付深黒加工  
伊勢木綿 - 製品染め -  
Size / S M L ¥21,000 (+tax)

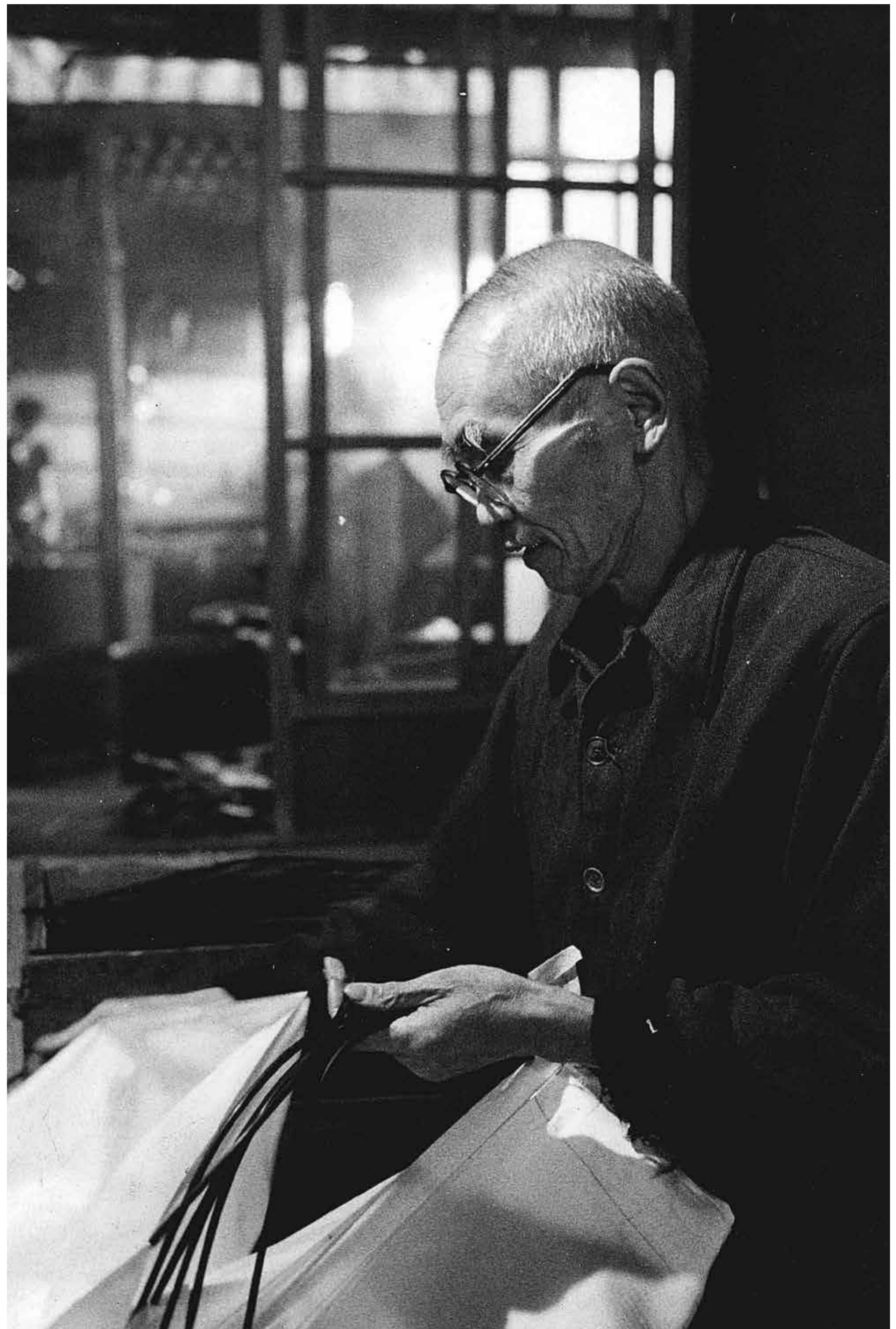
ものを大事に長く使う。この精神はSANGOUの冠衣に通ずる。

10年着る前提のキナリの冠衣。その過程ではやはり汚れなどが付着してしまうこともあるだろう。そんな時は京都紋付の製品染めをして、黒冠衣に生まれ変わらせてまた着ることができる。もちろん最初から黒冠衣を着ていただくことも可能。京都紋付が製品染めを受けてくれた事で冠衣の「10年着れる」というテーマはより盤石のものとなったのだ。

日本人にとって大事な色である「黒」。なぜ日本人は正装の際は黒なのか。京都紋付の考え方は美しい。「黒とは単なる色ではありません。自身を消し、相手に礼を尽くすことを表明する為の美意識です。」ということだ。美意識。これは日本人に深く根付いている感覚だと感じる。我々現代の日本人が忘れてしまっている感覚。その美意識をもう一度取り戻すために、日本が誇る世界一の「黒」をあなたも纏いませんか?



▲四代目の荒川徹氏との一枚。





# TRADITIONAL CRAFTSMAN

丹後ちりめん 織元こばやし / 小林 孝裕

## 着物の街与謝野で 三百年の歴史を持つ 京都丹後ちりめん

SANGOU MAGAZINEのvol.1をお持ちだろうか?もしお持ちの方は表紙を見ていただきたい。菊田参号が羽織っている羽織。あれは10年以上前に原宿の露店で購入したものだ。その当時、菊田参号はハットに下駄にデニムに羽織という格好をよくしていた。大人になるにつれ羽織の登場回数は極端に減り、最近では全く着なくなっていた。しかし今回のSANGOUの立ち上げの際に、テーマが「ラフに着れる着物」ということから、その当時着ていた羽織の存在を思い出し、撮影の際に使用、また展示会にて着用していた。

この言葉も展示会の際にいただいた言葉なのだが、「冠衣の上に羽織、これを定番にしちゃえばいい、羽織作りなよ」というお言葉をいただいた。それは良いと早速羽織の生地を探し出す。着ていたものがちりめんのもので、その風合いが気に入っていたので、ちりめんの伝統工芸品を探し始めた。



▲SANGOU黒羽織。

それは京都にあった。京都の丹後ちりめんという300年の歴史をもつ生地だ。京都にある与謝野という土地で織られているシルクの高級なちりめん。調べていくうちに一つの織元に目が止まる。丹後ちりめん織元こばやし。目に止まった理由はそのうたい文句だ。「白生地専門」と書いてあった。お話を伺うと白生地にこだわって作っているため、染めるならば他で、ということだった。その職人魂に惚れ、とにかく現地に伺うことにした。

与謝野は遠かった。京都といっても、日本海側のためとにかく遠かった。京都駅を出発してから電車で揺られること4時間。日本三景である天橋立が見えてくれば、もう近い。駅に降り立つと「着物の街与謝野へようこそ」の文字がお出迎え。東京からだとなかなかの旅路。いよいよ来たかとも高ぶる。

こう言っただけで与謝野は田舎町だ。古き良き静かな雰囲気のある町だった。ただ難儀したのは、駅を降りてから織元にいくまでの交通手段。駅からはタクシーに乗る予定だったが、駅前にタクシーはいない。バスもない。なのでちりめん徒歩で向かう。小一時間ほど歩くと遂に到着。

落ち着いた田舎町にこんな人相の人間が来てしまったということに小林氏は暖かく出迎えていただいた。早速工場を見せていただくとその織り機の複雑な作りや動きに驚愕。丹後ちりめんの最大の特徴は糸に撚りをかけて反物を織ること。縦糸と横糸の複雑な絡みによって織細な柄を表現しているのだ。その織



▲丹後ちりめん織元こばやしの玄関。



▲黒羽織の白生地。流水柄。

TC-01 黒羽織 - 流水 -

「京都紋付深黒加工」  
京都丹後ちりめん - 反物染め -  
Size / Free ¥154,000 (+tax)

り工程は、、、実際に見ないとわからないと思われる。言葉での説明は非常に難しい。織りについて知りたい方はSANGOUのHPに動画があるのでご覧いただけたらと思う。

腕によりをかけて〇〇する…などと言うが、これの語源は糸に撚りを掛けるから…ともいわれているという。手間ひまかけて物事をするといった意味合いから来ているのだろう。しかしそれだけ織細に丁寧な恐ろしく手間暇をかけて丹後ちりめんは生み出されている。撚りの入った糸を織込み、後に精練の際に反物が縮み、シボを出し、反物にコシのある風合いができる。

その反物を京都紋付の深黒加工で染め上げる。そうやってSANGOUの羽織は贅沢に作られている。ラフに着れる着物。高価ではあるが一生付き合える価値のある羽織である。本格的な和装は敷居が高いと感じている方は、この羽織をオススメする。デニムに気軽に羽織って、まずは着物をラフに楽しんで欲しい。



▲小林孝裕氏との一枚。





# ONLY ONE CORP. in KOJIMA

株式会社ショーワ

## デニムの聖地岡山児島で たった一社の児島一貫生産 テキスタイルメーカー

岡山デニム。昨今よく耳にするこの言葉。メイドインジャパンのデニムといえば、世界的にも代表的な存在と言える。デニムの聖地岡山県倉敷市児島。よほど盛り上がっているのだろうと菊田参号自身も思っていた。しかし知っているだろうか。その児島という土地で、一貫生産でデニムを作っているのは「たった一社」しかないということ。

株式会社ショーワ。それがその一社だ。SANGOUとの出会いはインスタグラム。なんとも現代的だが、まだ繋がっていない誰かとの繋がりになるということは素晴らしいことだ。SANGOUで上げていた投稿がたまたま、営業担当の平井氏の目に止まり、わざわざ東京まで生地を持って見せに来てくれたのだ。まずその心意気に感服。心を打たれたのは言うまでもない。

しかし、その時点ではSANGOUでデニムをやるつもりは毛頭なかった。その理由は、SANGOUで作るまでもなく、すでに素晴らしいデニムが世界には大量に存在しているからだ。そこにわざわざ参入していくほどのデザイン力も、技術もSANGOUには無い。その上、菊田参号自身が欲しいデニムと言うものが、現行のそれで満足しており、困っていると言うことがなかった。「岡山デニム」を使うと言っても、すでにそれは色んなメーカーが出しているもので、それだけでSANGOUのデニムが他との差別化になるとは思えなかった。それがデニムをSANGOUでやらない理由だった。

しかし平井さんとお話をさせていただいている中で、その思いは大きな変化を遂げることになる。前述の通りだが、まず岡山デニムというものの認識が大きく変わった。盲目的に「岡山デニム」と言うものが盛り上がっているのだ、と言う認識だったが、その実、児島という聖地で一貫生産をしているのはたった一社なのだ。つまり本物の児島デニムはたった一社でしか作っていないということ。そのことを多くの日本人が知らないことだろう。

そしてもう一つ。この理由がSANGOUでデニムをやるきっかけ

になった。ショーワでデニムを織っている機械。それが豊田自動織機の旧式力織機「GL-3」を使っているということ。これには何かしらの運命めいたものを感じた。現在SANGOUの代表作となっている「冠衣」。その伊勢木綿もまた豊田自動織機を使用しているのだ。「冠衣」に合わせるデニム。これはもうショーワで作ってもらわなければならない。平井氏と話せる頃には、そういう想いになっていた。



その後、デニムをやることを決めた菊田参号は、岡山に飛ぶ。とにかく現場にいて人に会ってみるのが信条だ。社長の高杉氏や副会長の片山氏にご紹介いただき、SANGOUのコンセプトをお話したところ、あたたかく聞いていただけた。平井氏に案内していただき、工場を拝見する。すると現場に立っている高齢の方に話しかけられる。後に何うとなんと会長さんというではないか。いまだ現役で現場に立ってられる姿勢には、社長さんとお話させていただいた時にも感じたのだが、なんともあったかい空気に満ちた素晴らしい会社と感じた。繊維業の生産地が急速に中国およびその周辺国にシフトしている中、コストではなく日本でしか出来ないことにこだわり、ものづくりをしているその姿勢に胸を打たれた。

そんな流れでSANGOUデニムは始まった。しかし、当たり前なものを作っても仕方がない。素晴らしいデニムが世の中には溢れている。そこで自分が欲しいがなかなかないものを作ろうと考



RD-01 黒デニム

岡山児島産「GL3 セルビッチリジットデニム」  
13.5oz (ポケット伊勢木綿)  
Size / S M L ¥28,000 (+tax)

えた。それが太めのブラックジーンズだ。最近とはかくスキニーが流行しており、ストレッチの効いたタイトなジーンズが多いように思う。それに加え、黒のデニムが圧倒的に少ない。なかなか見かけない。もちろん大手のメーカーからは出ているが、それ以外であまり選ぶ余地がないように感じる。

そこでSANGOUのデニムは、不良つばい太めのブラックのデニムということになった。菊田参号の好みまさにそれなのだ。無骨で硬いデニムこそ男気を感じるのだ。

生地は先述のGL-3で織られた「セルビッチデニム」を使用。防縮の効果のある「サンフォ加工」のみを施した「リジットデニム」だ。防縮以外は生の状態なので、冠衣同様にこれもまた「育てるデニム」ということになる。本物の「岡山児島のデニム」。しかも歴史のあるGL-3で生み出された「セルビッチデニム」。ポケットとパッチには「伊勢木綿」を使用している。冠衣同様に「育てて」いくことが楽しいデニム。長く履いていただきたい。



▲営業担当の平井氏との一枚。

